

「正信偈」について（第十七回）

正信偈の教え中 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による

どうしゃくけつしようどうなんしよう

道綽決聖道難証

道綽、聖道の証しがたきことを決して、

ゆいみようじょうどかつうにゆう

唯明浄土可通入

ただ浄土の通入すべきことを明かす。

まんぜんじりきへんごんしゅ

萬善自力貶勤修

萬善の自力、勤修を貶す（退ける）。

えんまんとくごうかんせんしよう

円満徳号勸専称

円満の徳号、専称を勧む。

さんぷさんしん けおんごん

おしえ おんごん

三不三信誨慇懃

三不三信の誨、慇懃にして、

ぞうま ほうめ どうひいん

ぞうまつほうめつ

像末法滅同悲引

像末法滅、同じく悲引す。

いつしようぞうあくちぐぜい

もうあ

一生造惡値弘誓

一生惡を造れども、弘誓に値いぬれば、

しあんにようかいしようみようか

至安養界証妙果

安養界に至りて妙果を証せしむと、いえり。

〔意訳〕

道綽禪師は、聖道門では覚ることが困難であることを明らかにして、

ただ浄土門のみが通りやすく入りやすいことを明らかにされた。

さまざまな善を自力によって勤め励むことを退けられた。欠けることのない徳を具えた名号をもつばら称えることを勧められた。

三不信と三信の教えを懇切に説いて、像法と末法と法滅のいずれの世

でも、大悲の本願は同じくはたらく。

一生の間、罪惡をなす者も、阿弥陀仏の誓願に遇うならば、極樂浄土に往生して、涅槃きとりという妙なる証を得る、と教えられた。

道綽※禪師は、末法で五濁の世にあつては、自力によつて修行しようとする聖道門の教えでは覺りは得られないことを明らかにされました。そして、阿弥陀仏の願いとして凡夫に差し向けられている他力の念仏によつて浄土に往生するという、浄土門のおしえこそが私たちの通るべき道であることを明らかにされたのです。

自分の力では仏になることができない凡夫を浄土に迎え、そこで仏に成らせようとされるのが阿弥陀仏の願つておられることです。しかも、煩惱に覆われて、自分の力では浄土に往生する原因を作れない凡夫をそのままで往生させるために、阿弥陀仏が施し与えておられる「南無阿弥陀仏」をそのまま受け取つて称えるように勧められているのです。

自力の信心が「三不信」であるのに対して、他力の信心は、純粹で混じり物が無く(淳心)、二心がなくて散乱することもなく(一心)、一貫して持續する(相続心)と懇切に教えられた。阿弥陀仏の「像法」※「末法」「法滅」の世の人びとを浄土に迎え入れて救いたいと願われた他力の念仏を素直に頂こうとする他力信心の教えに導き入れようとしてくださったのです。

たとえ、一生の間を通じて、さまざまな惡を造る者、すなわち、釈尊が顕かにされた真実、人が生きる普遍の道理、それに背くような者(惡人)であっても、阿弥陀仏の広大な誓願に遇うことになれば、心が安らかとなり、身が養われる阿弥陀仏の極樂浄土に往生して、そこで仏の覺りを得るのだ、と教えられました。

※「正法」仏滅後五百年・教えが正しく伝わる、「像法」かたちその後の一千年・像ばかりの教えが残る、「末法」その後の一万年・かろうじて教えは伝わっているけれども行も証も伴わない、「法滅」その後は仏法は完全に衰滅し、やがて遠い未来に次の仏が世に出られて、また「正法」に入る。